

1. 目的

気柱の共鳴により空気中における音の伝搬速度を測定する。

2. 原理

(a) 音波の基本式

λ : 音波の波長, T : 周期, f : 振動数, v : 伝搬速度 とすると,

$$v = \frac{\lambda}{T} = f\lambda \quad (1)$$

(b) 気柱の振動

l : 閉管の長さ, λ_m : 固有振動の波長 とすると,

$$l = (2n - 1) \frac{\lambda_m}{4} \quad (n \in N) \quad (2)$$

しかし, 実際には管内に入り出す空気の流れは管内で急に広がらないから, この定常波の腹にあたる場所は管内から口端補正 C だけ外側にある。よって気柱の長さは,

$$l = (2n - 1) \frac{\lambda_m}{4} - C \quad (n \in N) \quad (3)$$

となる。また, λ を求めるには共鳴する水面の位置 a_1, a_2, a_3, \dots を読み取り,

$$a_3 - a_1 = \lambda_{13}, \quad a_4 - a_2 = \lambda_{24}, \quad \lambda = (\lambda_{13} + \lambda_{24})/2 \quad (4)$$

となればよい。 a_4 まで得られないときは,

$$2(a_2 - a_1) = \lambda_{12}, \quad a_3 - a_1 = \lambda_{13}, \quad \lambda = (\lambda_{12} + \lambda_{13})/2$$

とし, a_3 も得られないときは, $2(a_2 - a_1) = \lambda$ とする。

(c) 音の速度

V_t : 実験中の速度, V_0 : 0 の乾燥した空気中の速度, t : 温度, e : 飽和水蒸気圧, p : 気圧 とすると,

$$V_0 = V_t \left\{ 1 - 0.00183t - \frac{3e}{16p} \right\} \quad (5)$$

なお, 実験中の音の速度 V_t は γ : 空気の定圧比熱と定積比熱の比, p : 大気圧, ρ : 密度 [kg/m^3] として, 理論上

$$V_t = \sqrt{\frac{\gamma p}{\rho}} \quad (6)$$

3. 実験装置

音叉, ゴム槌, 共鳴用ガラス管 (内径 29.45[mm]), 水位変化装置, 温度計

4. 実験方法

図 1 に装置概要を示す。

(a) まず気温を温度計で測り, これを t_1 とする。

- (b) 容器 E を静かに吊り上げて、管内の水面を管口近くに上げ、音叉を打ち鳴らして管口 A の上方に持ち近づけ、容器 E を徐々に下げて水面を次第に下げる。水面がある高さ B に来ると音が強く聞こえる。その最強時の水面の位置を読み取る。次に水面を下から次第に上げて、再び B に来て強く聞こえるときの水面の位置を読み取り、両者の平均 a_1 とする。
- (c) 次に水面を B から AB の 2 倍ぐらい下の C に下げれば共鳴するはずであるから、その位置を B と同様にして求め、その読みを a_2 とする。さらに水面を AB の 4 倍、6 倍ぐらい下げて次の共鳴点 D, E などが求められたら、その読みを a_3, a_4 等にする。
- (d) 終わりに再び気温を測りこれを t_2 とし、 t_1 との平均 t を測定中の温度とする。管内は水蒸気で飽和しているとみなされるから、 t [] における飽和水蒸気圧を表から求めて e [kPa] とする。圧力の変化は音速に影響しないから、気圧 p は 101.3[kPa] とし、差し支えない。
- (e) 管の直径を測って半径 r を求め、管口の物差しの読み a_0 をとって、

$$a_1 - a_0 = l_1 = \frac{\lambda}{4} - C \quad (7)$$

より、得られた λ を使って口端の補正係数 C/r を求める。

5. 結果

- (a) 大気圧 : 1.013×10^5 [Pa], 気温 : 21[], 飽和水蒸気圧 : 17.644[Pa], 管口の物差し読み (a_0) : 94[mm]
- (b) 各場合の水面位置を表 1~2 に示す。

(c) 波長 λ を式 (4) より計算する．例えば, 表 1 の 1 回目の数値を用いると, 水面上昇時は

$$\begin{aligned}a_3 - a_1 &= \lambda_{13} \text{ より} \\485 - 155 &= \lambda_{13} \\ \therefore \lambda_{13} &= 330 \text{ [mm]} \\a_4 - a_2 &= \lambda_{24} \text{ より} \\655 - 320 &= \lambda_{24} \\ \therefore \lambda_{24} &= 335 \text{ [mm]} \\ \lambda &= (\lambda_{13} + \lambda_{24})/2 \text{ より} \\ \lambda &= (330 + 335)/2 \\ \therefore \lambda &= 332.5 \text{ [mm]}\end{aligned}$$

そして以下同様に行い, 表 3~4 に示す．

(d) V_t を式 (1) より (a) で求めた λ を用いて計算する．例えば, 表 3 の水面上昇時の V_t は,

$$\begin{aligned}V_t &= f\lambda \text{ より} \\V_t &= 1000 \times 332.5 \\ \therefore V_t &= 332.5 \text{ [m/s]}\end{aligned}$$

そして以下同様に行い, 表 3~4 に示す．

(e) V_0 を式 (5) より (c) で求めた V_t を用いて計算する．例えば, 表 3 の水面上昇時の V_0 は,

$$\begin{aligned}V_0 &= V_t \left\{ 1 - 0.00183t - \frac{3e}{16p} \right\} \text{ より} \\V_0 &= 332.5 \times \left\{ 1 - 0.00183 \times 21 - \frac{3 \times 17.644}{16 \times 1.013 \times 10^5} \right\} \\ \therefore V_0 &= 319.7 \text{ [m/s]}\end{aligned}$$

そして以下同様に行い, 表 3~4 に示す．

(f) C を式 (7) より求め, 最終的に C/r を計算する．例えば, 表 3 の水面上昇時の C/r は,

$$\begin{aligned}a_1 - a_0 &= \frac{\lambda}{4} - C \text{ より} \\155 - 94 &= \frac{332.5}{4} - C \\ C &= 22.125 \\ \therefore \frac{C}{r} &= \frac{22.125}{(29.45/2)} \\ &= 1.503\end{aligned}$$

そして以下同様に行い, 表 3~4 に示す．

(g) 表 1~4 の各平均の数値を用いて, 水面上昇時と水面下降時の平均を表 5~6 に示す．

表 1 共鳴点 ($f = 1[\text{kHz}]$) 単位 [mm]

回	水面上昇時				水面下降時			
	a_1	a_2	a_3	a_4	a_1	a_2	a_3	a_4
1	155	320	485	655	155	320	485	650
2	150	315	485	650	150	315	485	650
3	155	320	490	665	155	320	485	660
4	150	320	495	660	155	320	490	655
5	155	320	490	655	150	320	490	660
平均	153	319	489	657	153	319	487	655

表 2 共鳴点 ($f = 2[\text{kHz}]$) 単位 [mm]

回	水面上昇時				水面下降時			
	a_1	a_2	a_3	a_4	a_1	a_2	a_3	a_4
1	110	180	275	350	110	190	270	345
2	115	190	265	345	110	190	275	350
3	120	190	270	345	115	180	265	340
4	110	185	260	340	115	190	270	345
5	115	190	265	345	115	185	260	345
平均	114	187	267	345	113	187	268	345

表 3 計算結果 ($f = 1[\text{kHz}]$)

回	水面上昇時				水面下降時			
	$\lambda[\text{mm}]$	$V_t[\text{m/s}]$	$V_0[\text{m/s}]$	C/r	$\lambda[\text{mm}]$	$V_t[\text{m/s}]$	$V_0[\text{m/s}]$	C/r
1	332.5	332.5	319.7	1.503	330	330	317.3	1.46
2	335	335	322.1	1.885	335	335	322.1	1.885
3	340	340	326.9	1.63	337.5	337.5	324.5	1.927
4	342.5	342.5	329.3	2.012	335	335	322.1	1.545
5	335	335	322.1	1.545	340	340	326.9	1.969
平均	337	337	324	1.715	335.5	335.5	322.6	1.757

表 4 計算結果 ($f = 2[\text{kHz}]$)

回	水面上昇時				水面下降時			
	$\lambda[\text{mm}]$	$V_t[\text{m/s}]$	$V_0[\text{m/s}]$	C/r	$\lambda[\text{mm}]$	$V_t[\text{m/s}]$	$V_0[\text{m/s}]$	C/r
1	167.5	335	322.1	1.757	157.5	315	302.9	1.587
2	152.5	305	293.3	1.163	160	320	307.7	1.639
3	152.5	305	293.3	0.8234	155	310	298.1	1.205
4	152.5	305	293.3	0.8234	155	310	298.1	1.205
5	152.5	305	293.3	1.163	155	310	298.1	1.205
平均	155.5	311	299.1	1.146	156.5	313	301	1.368

表 5 共鳴点 単位 [mm]

	$f = 1[\text{kHz}]$				$f = 2[\text{kHz}]$			
	a_1	a_2	a_3	a_4	a_1	a_2	a_3	a_4
平均の平均	153	319	488	655	113.5	187	267.5	345

表 6 計算結果

	$f = 1[\text{kHz}]$				$f = 2[\text{kHz}]$			
	$\lambda[\text{mm}]$	$V_t[\text{m/s}]$	$V_0[\text{m/s}]$	C/r	$\lambda[\text{mm}]$	$V_t[\text{m/s}]$	$V_0[\text{m/s}]$	C/r
平均の平均	336.3	336.3	323.3	1.732	156	312	300.1	1.257

6. 考察

式 (6) を用いて理論上の V_0 を計算すると,

$$V_0 = \sqrt{\frac{\gamma p}{\rho}} \text{ より}$$

$$V_0 = \sqrt{\frac{1.403 \times 1.013 \times 10^5}{1.293}}$$

$$\therefore V_0 = 331.5 [\text{m/s}]$$

となるから、表 6 の V_0 と比較すると、 $f = 1[\text{kHz}]$ の時は $V_0 = 323.3[\text{m/s}]$ であるから、 $(1 - 323.3/331.5) \times 100 = 2.474[\%]$ の誤差があり、 $f = 2[\text{kHz}]$ の時は $V_0 = 300.1[\text{m/s}]$ であるから、 $(1 - 300.1/331.5) \times 100 = 9.472[\%]$ の誤差があったので、どちらも理論上の V_0 より遅く、 $f = 2[\text{kHz}]$ の時の方が $f = 1[\text{kHz}]$ の時より誤差が $7.002[\%]$ 大きかった。これは共鳴点が正確にわからないため、 a を目分量で読み取ったからで、 $f = 2[\text{kHz}]$ の時は共鳴点が分かりにくかったので、余計に目立った。そして、結果的に λ を実際の値より短くなるように a を読み取ったので、 V_0 が理論上の V_0 より遅くなった。

また, $V_t = 331.5 + 0.6t$ の関係式があるから, 実験中の理論上の V_t は

$$V_t = 331.5 + 0.6 \times 21 \text{ より} \\ \therefore V_t = 344.1 \text{ [m/s]}$$

となるから, 表 6 の V_t と比較すると, $f = 1$ [kHz] の時は $V_t = 336.3$ [m/s] であるから, $(1 - 336.3/344.1) \times 100 = 2.267$ [%] の誤差があり, $f = 2$ [kHz] の時は $V_t = 312$ [m/s] であるから, $(1 - 312/344.1) \times 100 = 9.329$ [%] の誤差があったので, どちらも理論上の V_t より遅く, $f = 2$ [kHz] の時の方が $f = 1$ [kHz] の時よりも誤差が 7.062[%] 大きかった. 誤差の原因は V_0 と同じと思える.

そして, 口端の補正係数 C/r については理論上では 0.6 であるが, 実験結果は $f = 1$ [kHz] の時で 1.732, $f = 2$ [kHz] の時で 1.257 だったので, 誤差はそれぞれ 188.7[%], 109.5[%] と大きくずれた. 0.6 という数値は λ が r に比べて十分大きい時に成り立つらしいが, 表 3 と表 4 を見比べてみると表 3 の方が λ が大きいにもかかわらず, C/r の値が表 4 の方よりも 79.2[%] 大きく外れているので, 本当に理論上の数値が正しいかどうか分からない. しかし, この実験では最高で $\lambda = 23r$ 程度なので, これを $\lambda = 100r$ ぐらいにしたら理論と一致するかもしれない.

さらに, $f = 1$ [kHz] と $f = 2$ [kHz] の V_0 , V_t , C/r の数値を平均すると, $V_0 = 324.2$ [m/s], $V_t = 311.7$ [m/s], $C/r = 1.495$ となり, 理論上の値と比較すると誤差はそれぞれ 2.202[%], 9.416[%], 149.2[%] となった.